

満潮をはさんで30分から1時間の間に行った。採集物はその場で5~10%の中性海水ホルマリンで固定し、後日選別しながらおおまかに査定した。

## (2) 結果

採集物の詳しい査定はまだしていない。選別作業中におおまかに査定した結果を表9に示した。フェフキダイ属のものは8月30日を除いて、6月1日から9月28日の間に毎回の採集で得られた。全長は18mm前後で、すべて稚魚期のものであった。また得られたフェフキダイ属の稚魚は、体高の違いから少なくとも2種以上を含んでいる。このサイズのフェフキダイ属の稚魚が採集されたのは、少なくとも沖縄では今回が初めてである。

羽地内海では定置網や釣りなどによって、ハマフェフキ、イトフェフキ、シモフリフェフキ、マトフェフキの幼魚が漁獲されているし、外海ではハマフェフキ、イトフェフキ、イソフェフキ、マトフェフキ、ハナフェフキの幼魚を採集または観察しているので、内・外海あわせて6種のフェフキダイ属の幼魚が確認されている。今後採集場所を増やすなどして継続した採集を行うことによって、まだ明らかにされていないフェフキダイ属の着底前後の生態の一端を解明できると考える。

## VII 放流海域の漁業の概要とハマフェフキの漁獲

放流海域は共同漁業権漁場第3号の一部に含まれ、名護、本部、今帰仁、羽地の4つの漁業協同組合が共有している。しかし放流海域である羽地内外海では、名護漁協の一部の漁業者が延縄などを、本部漁協のカツオ活餌船が季節的に棒受網を、また4漁協以外の漁業者が時々延縄などを操業する以外は、もっぱら羽地、今帰仁漁協の漁業者によって漁業が営まれている。

羽地漁協の仲尾次地区には、小型定置網(ます網)漁業が9経営体あり、最っとも多いときには羽地内海に16統、外海に14統の網が設置される。また塩屋・大宜味地区には、5経営体、6統の小型定置網が、赤丸崎から塩屋湾にかけて設置される(図1)。このほかに刺網、延縄、一本釣り、採藻漁業がみられる。また漁獲物は、一部の漁業者が名護漁協のセリ市場に出荷するのを除いては、仲買業者や地元の商店などへの相対売りが大部分を占めているので、漁獲量を知るのは難しい。現在、一部の漁業者にはハマフェフキについてだけ漁獲量や漁獲サイズの記帳を依頼している。

今帰仁漁協では、古宇利地区に3経営体、運天地区に2経営体の定置網があり、運天港付近、屋我地島の北と東側、古宇利島の南側に計9統の小型定置網が設置される。このほかに刺網、延縄、一本釣り、曳縄、採藻、ウニ漁などの漁業が古宇利地区を中心にみられる。また漁獲物のほとんどが名護漁協のセリ市場に出荷されるので、漁獲量を知るのは比較的容易である。

両漁協ともに単一漁業の専業はなく、いくつかの漁業を季節的に組合わせた漁業形態である。また延縄や一本釣りは、好天の多い時期(主に夏)にはこの海域以外へ出漁することもあるし、時化の多い時期(主に冬)はこの海域で刺網などに従事するようである。また定置網漁業者も刺網、延縄、採藻漁業などを兼業している。

このほか羽地内海や運天港は遊漁の絶好のポイントとなっているので遊漁者が多く、これらによるキヌクロダイ類などの釣獲も少なくないと思われる。

1979年7月から1984年12月までの今帰仁漁協の漁業者が名護漁協のセリ市場に水揚げしたハマフ

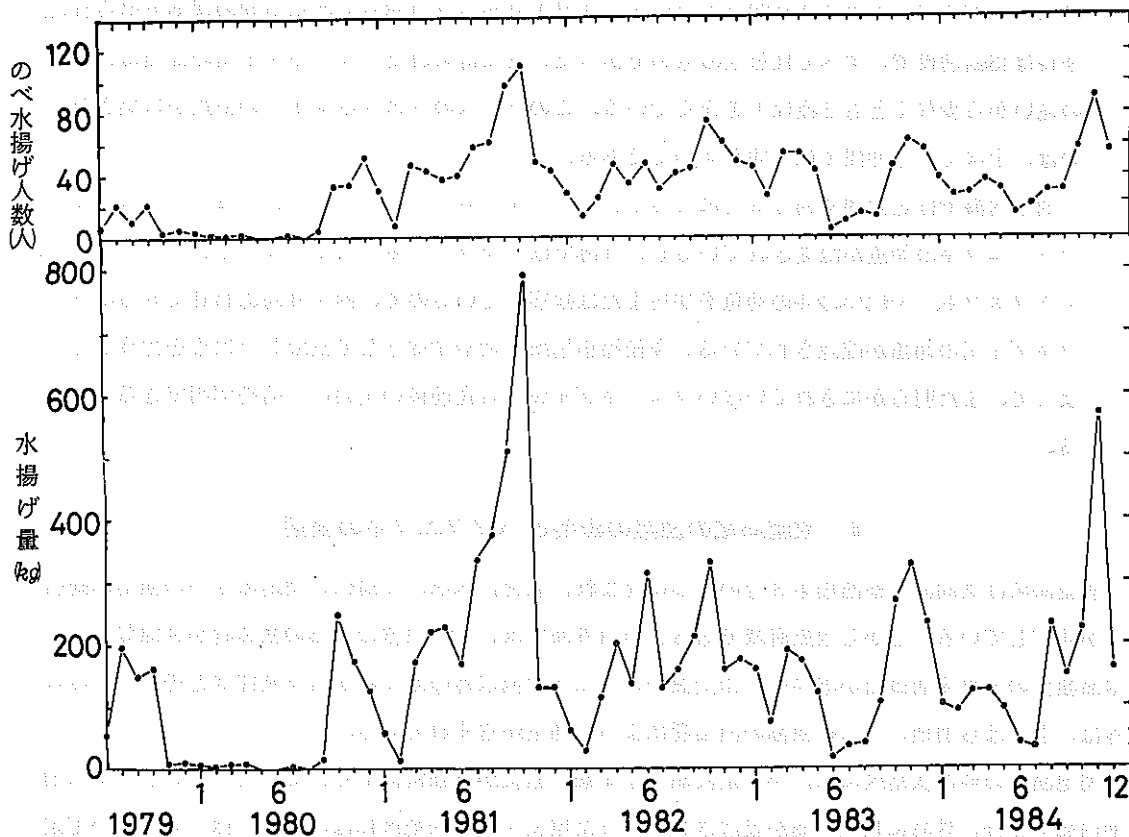


図28 1979年7月から1984年12月までの今帰仁漁協の漁業者の名護漁協市場へのハマフエフキの水揚げ量(下段)とハマフエフキを水揚げした月別のべ人数(上段)

エフキの量と、ハマフエフキを水揚げした月別のべ人数をセリ帳から調べて図28に示した。名護漁協のセリは1979年7月に開設された。図から今帰仁漁協の漁業者は市場開設当初にはセリに出す者は少なかったが、1981年1月以降は増えて、月による変動はあるが年ごとには安定しているのがわかる。また聞取りでも、現在は漁獲物の大部分がセリに出されるとのことである。したがって、1981年1月以降の図に示した漁獲量は、今帰仁漁協の漁業者によって漁獲されるハマフエフキのほぼ全量を示していると考えられる。ただし、セリするときには1つの山にハマフエフキとそれ以外の魚が混じることもあり、その場合には山の中で多数を占める魚種の名前がセリ帳に記載される。また量は少ないが、シモフリエフキもハマフエフキとして記載される。ハマフエフキの成魚は延縄などで多獲されるので、これらの漁業者がこの海域以外で操業することのある夏季などの水揚げ量には、ほかの海域での漁獲が含まれると思われる。以上のようなことはセリ帳から判断できないので、ここではハマフエフキと